

【本計画での指標の取り扱い】

○福島県の教育の動向を示すものとして、**計画期間中、継続的に数値を公表することが可能なものを指標として記載する。**

【指標に関する留意点】

○教育の成果については、**数値化することが極めて困難なものが多数存在している。**

- ・教育の目標と言われているWell-beingについては、多義的な要素を含んでいる。
- ・新学習指導要領に示されている3つの資質・能力のうち「学びに向かう力、人間性等」の中には、観点別評価や評定が馴染まず、個人内評価（一人一人のよい点や可能性、進捗状況についての評価）をすることとされているものもある。（2ページ参照）

○教育の成果と手段については相関関係が示されている事柄は増えているが、**因果関係については更なる検証が必要なものも多い。**（3ページ以降参照）

また、教育施策を実施した後、**成果がでるまでには一定の時間がかかる。**

○**調査に当たっての負担**についても考慮することが必要。

- ・財政負担はもとより、現場の事務作業の負担を考慮することが必要。多忙化解消アクションプランⅡ（令和3年2月5日福島県教育委員会）でも、働き方改革の観点から「調査・統計等の整理」を行うこととしている。

【計画の進行管理】

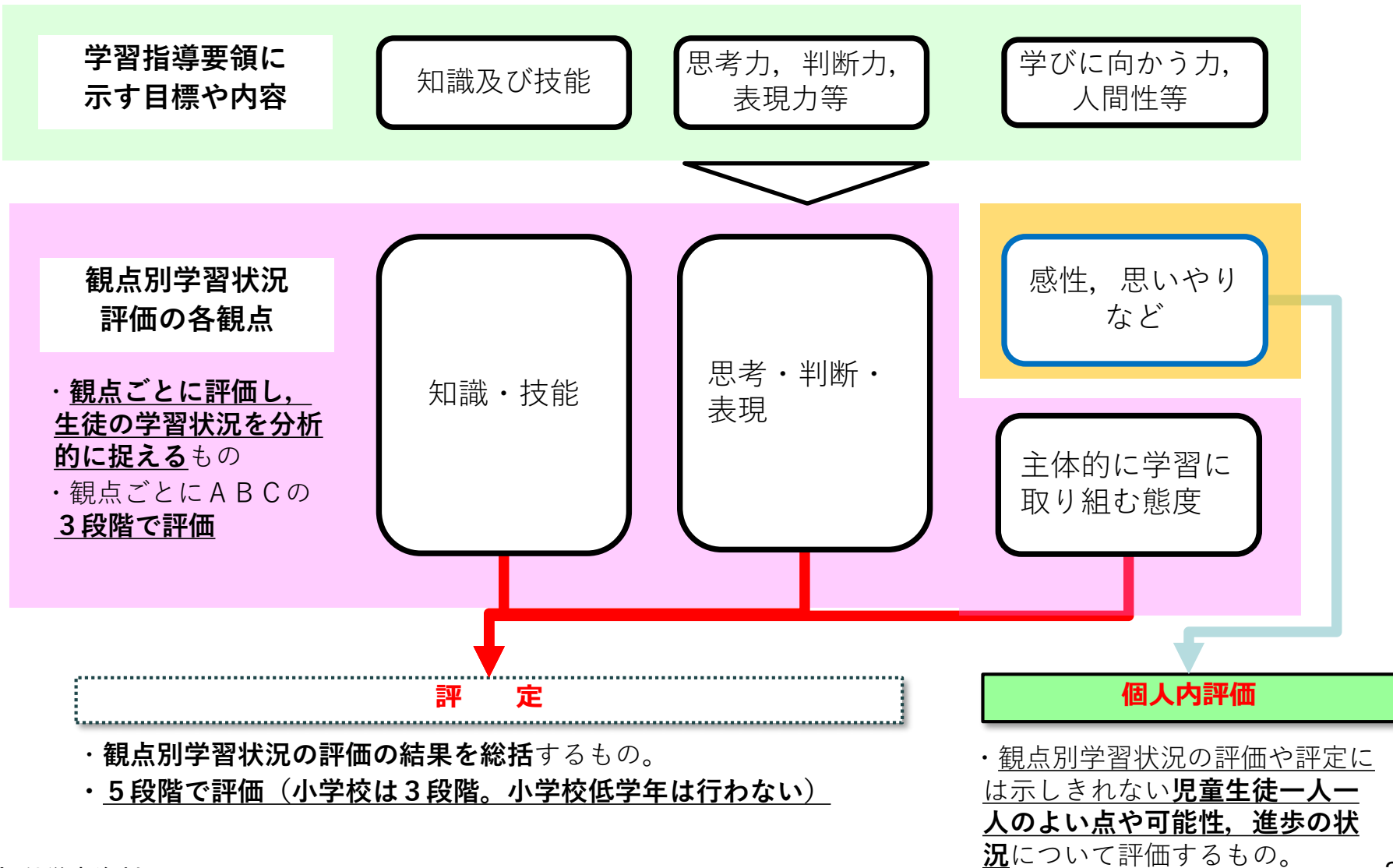
○上記の留意点を考慮し、毎年度の計画の進行管理に当たっては、本計画に記載した指標を参考としつつ、

- ・今後新たに実施された調査や単発で実施された調査
- ・当該時点での施策の進捗状況や卓越している取組等の定性的な内容等の**定量的・定性的な事柄を総合して点検・評価**を行う。

○なお、指標の数値について一定の改善がなされた場合に、その結果として、**望ましい教育が実現されたかという観点についても総合的に捉えて点検・評価**していくことが必要。

参考：新学習指導要領における評価の取り扱い

- ・各教科における評価は、**学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況を評価するもの（目標準拠評価）**
- ・したがって、**目標準拠評価は、集団内での相対的な位置付けを評価するいわゆる相対評価とは異なる。**



参考：学力と学び方の関係

- 「主体的・対話的で深い学び」は、児童生徒の「非認知能力」の向上や「学習方略」の改善を通して、学力を向上させる可能性がある。(①～④)
- 「学級経営」が、「主体的・対話的で深い学び」の実現や、子どもたちの「非認知能力」「学習方略」の向上に重要であり、結果として児童生徒の学力向上につながる可能性がある。(⑤～⑦)

埼玉県教育委員会による慶應義塾大学SFC研究所への委託により分かってきたこと



学習方略……児童生徒が学習効果を高めるために意図的に行う活動。
柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、人的リソース方略、認知的方略、努力調整方略。
非認知能力……自制心、自己効力感、勤勉性、やり抜く力等。

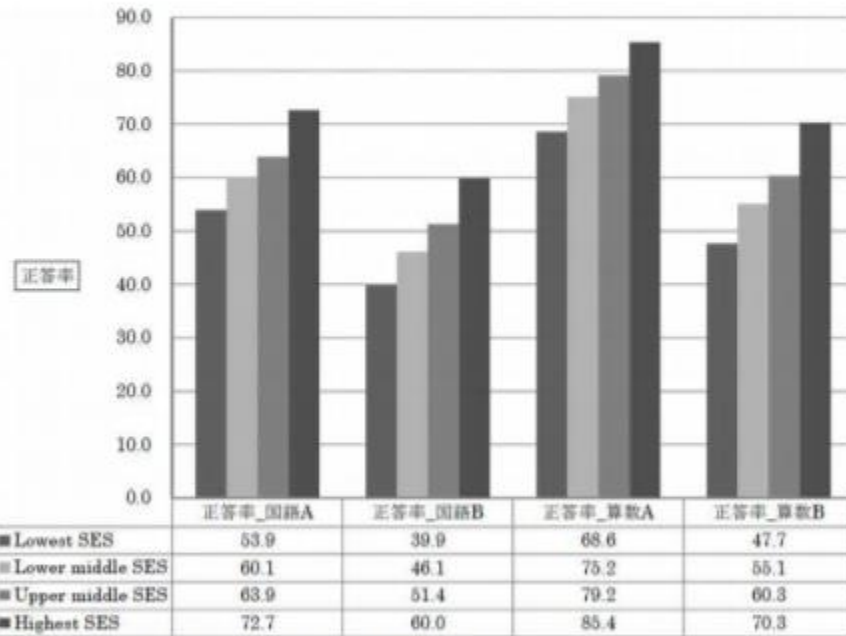
参考：学力とSESの関係

○ 所得をはじめとした家庭の社会経済的背景と学力には明らかな相関関係がみられる。

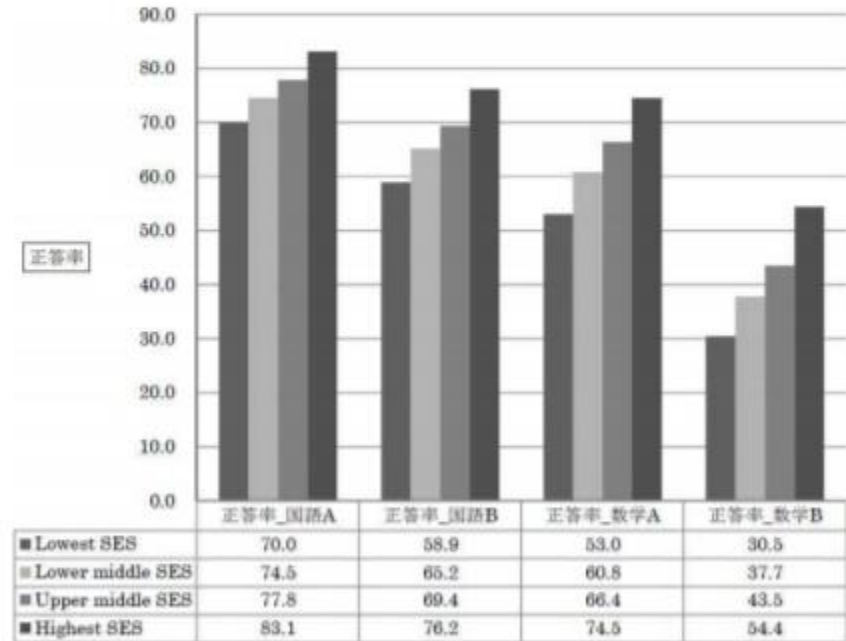
●家庭の社会経済的背景(SES)と各正答率

(※家庭の社会経済的背景 SES(Socio-Economic Status)は、家庭の所得、父親学歴、母親学歴の合成尺度)

【小6】



【中3】



注：各グループは社会経済的背景の高い順に並べ、4分割したものである。

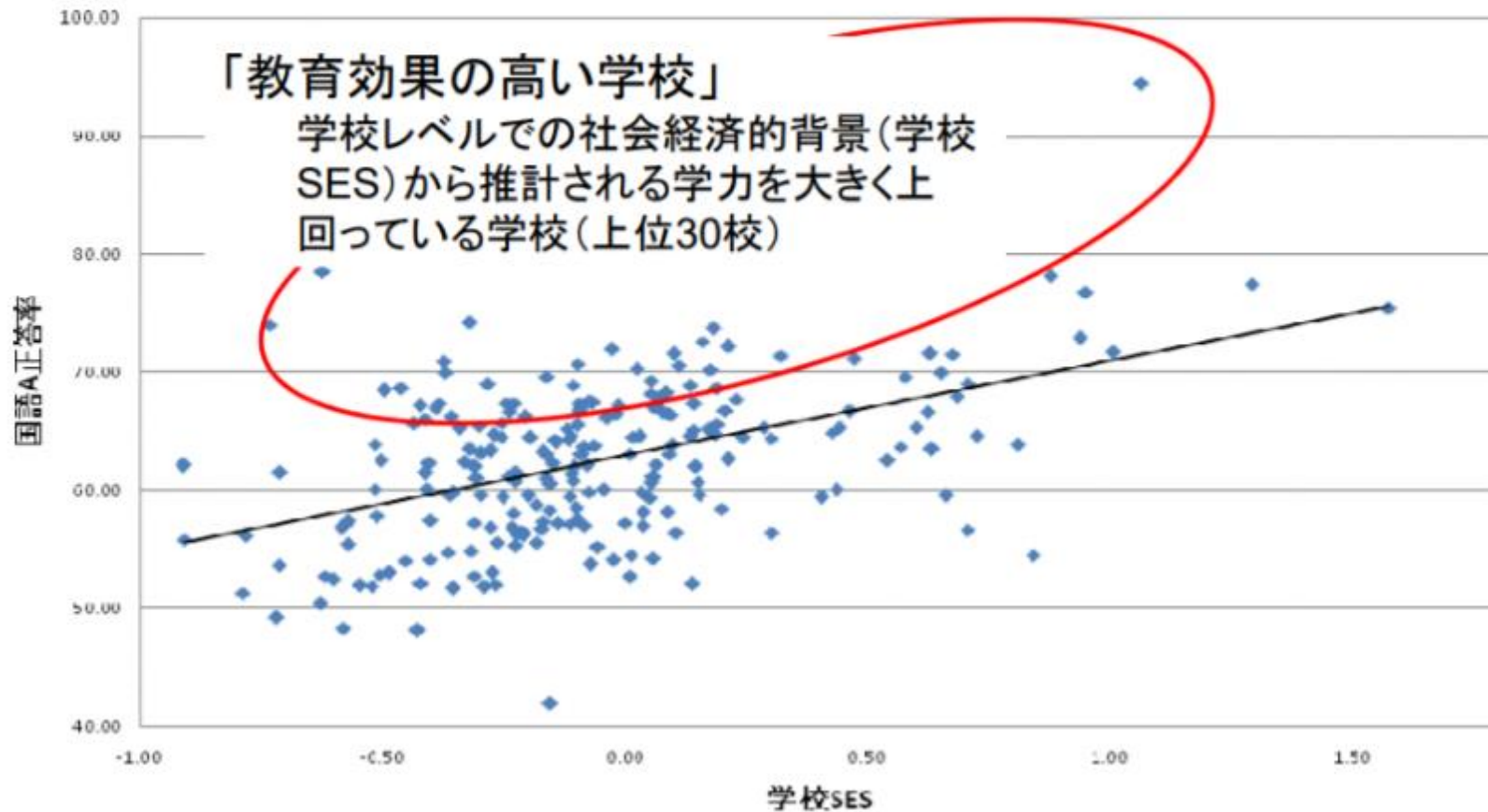
最上位1/4をHighest SES(最も高いグループ)、2番目の1/4をUpper middle SES(2番目に高いグループ)、3番目の1/4をLower middle SES(3番目に高いグループ)、4番目の1/4をLowest SES(最も低いグループ)としている。

A問題: 主として「知識」を問う問題。身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、
 実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など
 B問題: 主として「活用」を問う問題。知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、
 様々な課題解決のための構想を立て、実践し、評価・改善する力など

教育効果の高い学校 (平成26年度委託研究)

平成26年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究(効果的な指導方法に資する調査研究)」お茶の水女子大学

学校SESと国語A正答率の関係



SES(socio-economic status):

家庭の社会経済的背景。保護者に対する調査結果から、
家庭所得、父親学歴、母親学歴の三つの変数を合成した指標

参考：学力とSESの関係

教育効果の高い学校での取組み

児童生徒の家庭の社会経済的背景から見込まれる学力を大きく上回っている学校においては、①表現力・課題探究力の向上、②授業スタイル、③家庭学習の指導、④学力調査の活用、⑤少人数・TT・補充学習、⑥学校外リソースの活用、⑦実践的研修・研修成果の活用、といった観点で様々な取組みを行っている。

※「教育効果の高い学校」：学校レベルのSESから見込まれる学力を大きく上回る学校(上位30校)
 「教育効果の低い学校」：学校レベルのSESから見込まれる学力を大きく下回る学校(下位30校)
 (SES(socio-economic status)とは、家庭の社会経済的背景、家庭所得、父親学歴、母親学歴の3つの変数を合成した指標。)

1. 表現力・課題探究力の向上

例：児童が自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導

小学校 国語A	よく行った	どちらかといえば行った	あまり行っていない
教育効果の高い学校*	53.3%	43.3%	3.3%
教育効果の低い学校*	26.7%	53.3%	20.0%

【教育効果の高い学校での取組み】

- ・朝読書などの一斉読書の時間を週に1回以上定期的に設けた、**学級やグループで話し合う活動**を授業などで行った、学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えた
- ・児童に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした、総合的な学習の時間で、**課題の設定から始まる探究の過程を意識した指導**をした
- ・児童・生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めた、**児童・生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導**をした
- ・**言語活動**に重点を置いた指導計画を作成している

2. 授業スタイル

例：授業最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れた

小学校 算数A	よく行った	どちらかといえば行った	あまり行っていない
教育効果の高い学校	63.3%	30.0%	6.7%
教育効果の低い学校	26.7%	66.7%	6.7%

【教育効果の高い学校での取組み】

- ・授業の冒頭で**目標(めあて・ねらい)**を児童に示す活動を計画的に取り入れた
- ・授業の最後に学習したことを**振り返る活動**を計画的に取り入れた
- ・学習方法(**適切にノートをとる**など)に関する指導をした

3. 家庭学習の指導

例：算数の指導として、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか

小学校 算数B	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
教育効果の高い学校	63.3%	23.3%	13.3%	0.0%
教育効果の低い学校	23.3%	50.0%	23.3%	3.3%

【教育効果の高い学校での取組み】

- ・国語・算数の指導として、家庭学習の**課題の与え方について、教職員で共通理解**を図った
- ・家庭での学習方法等を**具体例**を挙げながら教えた(国・算共通)
- ・家庭学習の課題(長期休業の課題除く)について、**評価・指導**
- ・国語・数学の指導として、前年度までに、家庭学習の**課題(宿題)**を与えた

参考：学力とSESの関係

教育効果の高い学校での取組み

4. 学力調査の活用

例：全国学力状況調査等の結果を学校全体で教育活動を改善するために活用したか

小学校 国語A	よく行った	どちらかといえば 行った	あまり行っていない
教育効果の高い学校	40.0%	56.7%	3.3%
教育効果の低い学校	20.0%	63.3%	16.7%

【教育効果の高い学校での取組み】

・平成24年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果を、**学校全体で教育活動を改善するために活用した**
 平成24年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果について、**保護者や地域の人たちに公表や説明をした**
 平成24年度全国学力・学習状況調査、独自調査や学校評価の結果等を踏まえた学力向上の取組を保護者等に働きかけた

5. 少人数・TT・補充学習

例：算数の授業において、習熟度別の少人数指導を行うに当たって、学習集団をどう編成したか

小学校 算数A	1学級を2つ以上の学習集団に分けた	複数の学級から、学級とは別の2つ以上の学習集団に分けた	習熟度別の少人数指導を行っていない
教育効果の高い学校	66.7%	20.0%	13.3%
教育効果の低い学校	36.7%	13.3%	50.0%

【教育効果の高い学校での取組み】

・算数の授業において、**習熟度別の少人数指導**を行うに当たって、1つの学級を2つ以上の学習集団に分けた
第4学年のときに、算数の授業において、チームティーチングによる指導を多く行った
数学の指導として補充的な学習の指導を行った

6. 学校外リソースの活用

例：地域の人材を外部講師として招聘した授業を行ったか

中学校 国語B	よく行った	どちらかといえば 行った	あまり行っていない	まったく行っていない
教育効果の高い学校	26.7%	36.7%	30.0%	6.7%
教育効果の低い学校	6.7%	26.7%	40.0%	26.7%

【教育効果の高い学校での取組み】

・保護者からの意見や要望を聞くために、学校として懇談会の開催やアンケート調査を多く実施した
 ・ボランティア等による授業サポート(補助)を行った
 ・博物館や科学館、図書館を利用した授業を行った
 ・地域の人材を外部講師として招聘した授業を行った

7. 実践的研修・研修成果の活用

例：教職員が校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させているか

中学校 国語A	よくしている	どちらかといえば している	あまりしていない
教育効果の高い学校	43.3%	50.0%	6.7%
教育効果の低い学校	3.3%	80.0%	16.7%

【教育効果の高い学校での取組み】

・平成24年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果を、**学校全体で教育活動を改善するために活用した**
 平成24年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果について、**保護者や地域の人たちに公表や説明をした**
 平成24年度全国学力・学習状況調査、独自調査や学校評価の結果等を踏まえた**学力向上の取組を保護者等に働きかけた**

(出典)平成26年度文部科学省委託研究「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」(国立大学法人お茶の水女子大学)

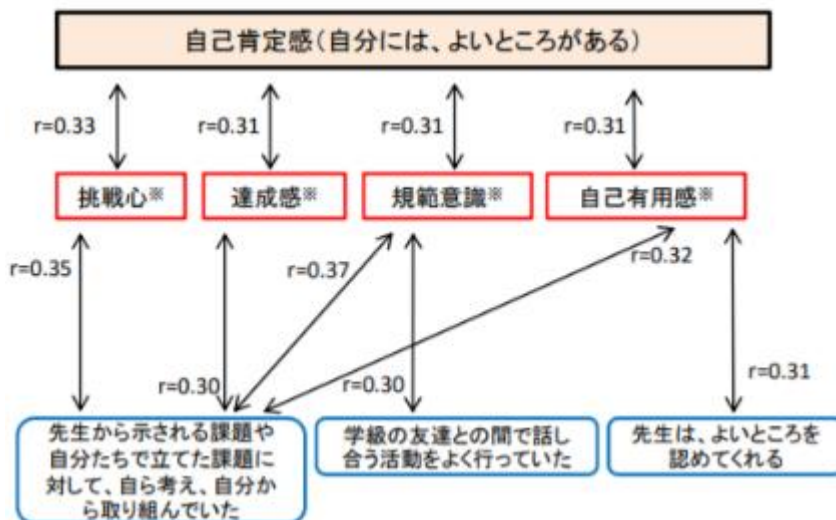
参考：自己肯定感と学力の関係

既存調査を用いた自己肯定感に関する分析結果

分析結果②

各調査において、「自己肯定感に関する項目と子供の意識に関する項目(赤枠)」、「子供の意識に関する項目(赤枠)と他の項目(青枠)」との関係については、図11～14に示す関係がみられた。

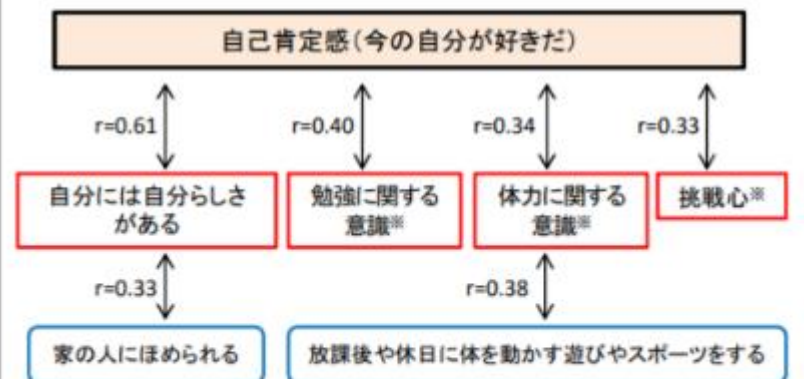
図11(全国学力・学習状況調査)



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。

- 挑戦心 : 「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」、
- 達成感 : 「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」、
- 規範意識 : 「人が困っているときは、進んで助けている」、
- 自己有用感 : 「人の役に立つ人間になりたいと思う」

図12(青少年の体験活動等に関する実態調査)



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。

- 勉強に関する意識 : 「勉強は得意な方だ」、
- 体力に関する意識 : 「体力には自信がある」、
- 挑戦心 : 「困ったときでも前向きに取り組む」

※「r」の値は、項目間の関係の強さを示すものである。

※図11については、小学校6年生の結果を示したもので、中学校3年生においても自己肯定感(自分には、よいところがある)と「挑戦心」、「達成感」について関係がみられ、「挑戦心」については、「先生から示される課題や自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいた」等の項目に関係がみられた。

※項目間の関係の強さについては、異なる調査間での比較はできない。

参考：自己肯定感とその他の要素の関係

図13(我が国と諸外国の若者の意識に関する調査)

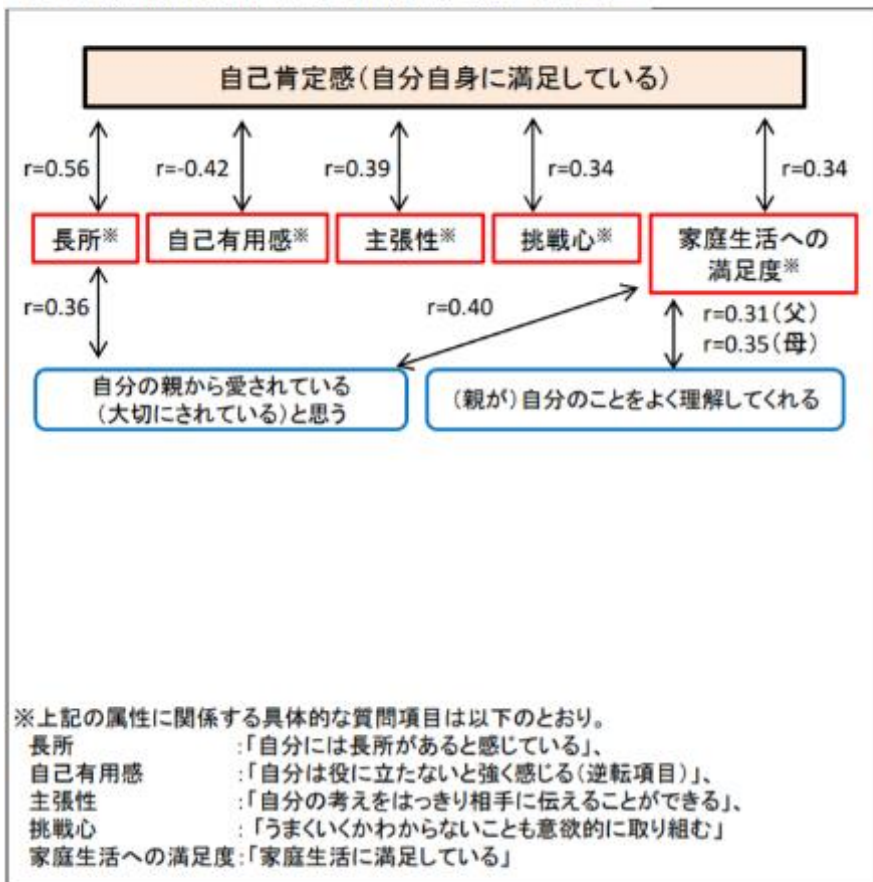
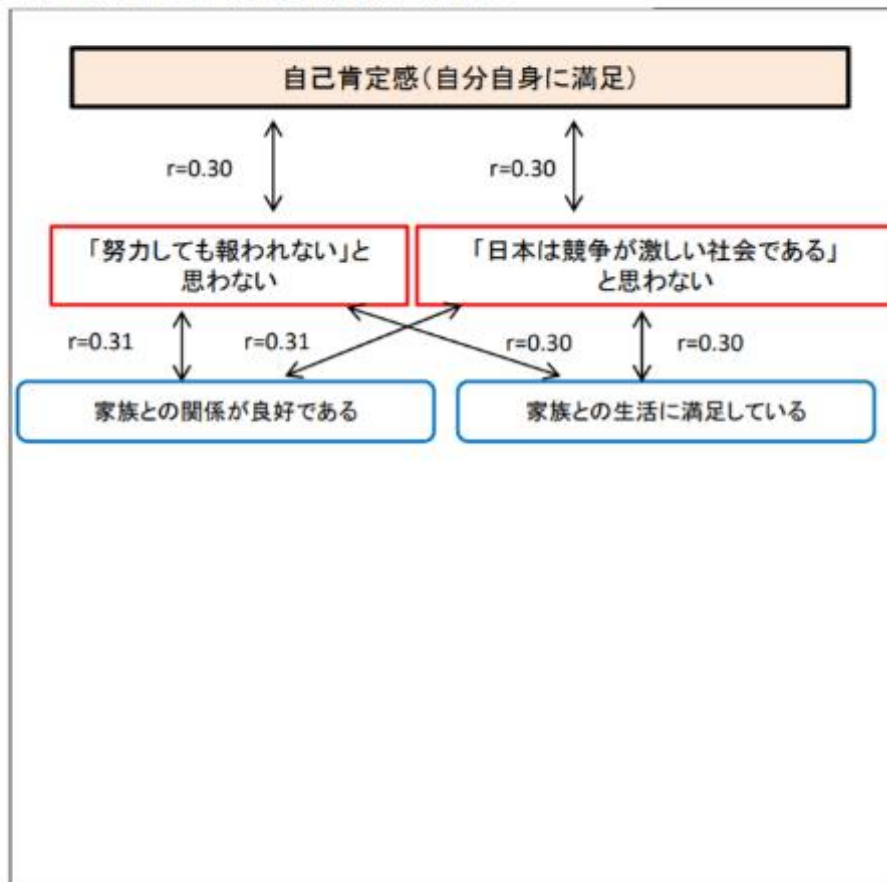


図14(高校生の生活と意識に関する調査)



※「r」の値は、項目間の関係の強さを示すものである。
 ※項目間の関係の強さについては、異なる調査間での比較はできない。